

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷八十第

號念記年百二誕生スミス・ムダア

口繪 スミスの肖像・筆蹟・國富論初版扉・記念會寫眞

スミスの生涯……………經濟學博士 本庄榮治郎

道徳的價值判斷に關するスミスの思想……………法學士 恒藤 恭

富國論の研究方法に就きて……………法學博士 財部 靜治

スミスとコンデアックとの價值論……………法學博士 田島 錦治

スミスの所謂「眞實の價格」について……………法學博士 河上 肇

スミスの價格論と分配論……………經濟學士 谷口 吉彦

スミスの自然主義觀と自由政策の見地……………法學博士 河田 嗣郎

スミスの自由放任論の特徴……………經濟學士 堀 經夫

スミスの自由貿易觀……………法學士 作田 莊一

スミスの對植民地策……………法學博士 山本美越乃

スミスの租稅原則……………法學博士 神戶 正雄

スミスの公債論……………法學博士 小川郷太郎

スミスと浪漫派經濟學……………法學士 山口正太郎

スミスの名其生涯及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書……………商學士 武藤 長藏

書目 スミス關係書目(細目裏面を見よ)

記事 スミス記念會記事……………經濟學博士 本庄榮治郎

スミス氏とコンヂャック氏の價值説

田 島 錦 治

目 次

第一章 緒 論

第二章 スミス氏の價值及び價格説の要領

第三章 コンヂャック氏の價值及び價格説

第一 物の價值の根本

第二 物の價格の根本

第三 價格の變動

第四章 結 論

第一章 緒 論

アダム・スミス氏が科學としての經濟學の創立者たることは、我學界の一般に認むる所なり。氏が千七百七十六年に著したる「諸國民の富の性質及び諸原因の研究」は、實に獨逸の斯學の大家ロッシヤール氏(William Roscher)が評せる如く「スミス氏以前に出たる一般問題に就ての總ての著書は、氏の意見に歸着するものと謂ふべく、而して氏の後に現はれたる總ての著書は、氏の設け

置きたる筋道に従ひ行くものと謂ふべし』。

スミス氏と略ぼ時を同ふして稍之に先たちたる佛國の自然法則學派一名重農學派 (Physiocrates, Agricultural School) に屬する學者はフランソワ・ケネー (François Quesnay) を師尙し、チユルコー氏 (Turgo) を除くの外は、皆ケネー氏の學說を唯傳承敷衍するに勉め、恰も宗教信者が祖師に對する如き信仰を有して、堅實なる一團を組織し、當時彼等は世上に「經濟學者」(Les Economistes) と稱せられたり。且ケネー氏が千七百五十八年即ち其六十四歳の時に著せる「經濟表」(Tableau Economique) はミラボー侯 (le marquis de Mirabeau) をして「文字の發明と貨幣の發明」と共に世界開闢以來の三大發明の一にして、而かも此は前二發明の結果なれども、此等の目的を完成する所のものなり」と激稱せしめたる所のものなり。蓋し經濟表に現はれたる財貨の循環の説明は前人未發のものと言ふべく、其他ケネー氏の派に屬する學者及びチユルコー氏等の説が、スミス氏の思想に或影響を與へたるは之を想像するに難からず。

氏以前の英國の學者等 (Child, Petty, Tucker, Dudley North, Gregory King &c.) の自由主義が間接に氏に影響せるは固より論なく、氏の師たる Hatcheson 氏の親友たる David Hume 及び自然法則學派は、氏に直接なる感化を與へたるは毫も疑を容れず。ハチソンは其千七百五十五年に公にしたる System of Moral Philosophy に於て、既に分業の重要を説き、價値の差異及び貨幣の起

原を論じ、穀物及び労働が價値の測度としては、貨幣よりは不動性を有するものなるを説きたり。ヒュームは數多の經濟論文を著したるが、千七百五十二年に此等を編輯し、Political Discourses の名稱を以て刊行したり、氏は重商論者を駁撃し、貨幣の分量は各國の需要に應じて自然に調節すべきものなることを力説したり。要するにスミス氏はヒュームを以て其時代に於ける最も有名なる歴史家及び哲學者として尊崇措かざりし所にして、其説の感化を直接に受けたるは固より當然なり。

然り而してスミス氏が自然法則學派の感化を受けたるは、蓋し氏が千七百六十五年に巴里に滞在したる時に在り。當時チュルゴー氏の名著 *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses* (千七百六十六年刊行) は未だ出でず、且スミスは夙に自由貿易を主張したりしが故に、此點に於てスミスが佛國學者の感化を受けたりと謂ふを得ず。然れどもチュルゴー及びケネー等との會見がスミス氏をして彼等の長を採り、短を捨て、氏の大著述に資する所あらしめたるは固より疑を容れず。之が證據としては、氏が歐洲大陸旅行前、グラスゴー大學に於て爲したる講義に於ては、只財貨の生産に就て論じ、未だ其分配に就て説く所なかりしに、「諸國民の富」に於ては始めて分配に關して重要な地位を與へたり。而して此事たるや、氏がケネーの經濟表及び純收入説に負ふ所なるは *Canan* 教授等の證明する所なり。

然れども自然法則學派の説は稍偏狭にしてスミス氏の説の廣汎公平なるに若かず。佛國學者ジ
 (ド)氏が『自然法則學者は狭き窓より外を窺ふが如く、スミスは中央の最高地點に立ちて四方を
 望むが如し』と謂へるは蓋し適評と謂ふべきなり (Gide et Rist, Histoire des doctrines économi-
 ques, 4e éd. 1923, p. 64)。例へば自然法則學派が只農業のみを以て生産的とするに反して、スミ
 ス氏は有らゆる有形的産業を以て生産的となし、國家の政策は農工商の各階級の利益を均しく擁
 護すべく、決して其中の或一階級のみに偏頗すべからずと主張したるが如き是なり。

スミス氏の大著「國民の富」が氏以前並に同時代の英國經濟學者哲學者及び佛國自然法則學派及
 ビチユルゴー氏等の影響感化を受けたるものなるは前述の如し。而して此書が永く此學界の明星
 として光輝を放ち、後世學徒を教導するの偉功は、余輩の欽仰措く能はざる所なり。今や氏の生
 誕二百年の祝祭を擧ぐるに際し、氏の傳記及び學説を紹介するは蓋し無用の業に非ず。余輩諸同
 人が相謀り、互に分業協力して爲す所の此講演及び編む所の此論集は、余輩經濟學徒か斯學の父
 に捧ぐる最も適切なる供物たらずんばあらず。而して余の自ら選みたる所は「スミス氏とコンヤ
 ック氏との價值説」といふ問題是なり。

抑も余か此問題を選みたる理由は、スミス氏か「國民の富」を著はせる同年に於てコンヤック
 氏 (Etienné Bonnot de Condillac) は「商業と政府との關係」(Le Commerce et le Gouvernement,

considérés relativement l'un à l'autre) なる書を著はし、而して此書の公にせる意見は自然法則學派の通説に卓越せる所多く、特に氏の價值説はアダム・スミスの説に比して優秀と思考せらるるものなればなり。氏はスミスの生誕前八年即ち西紀千七百十五年九月三十日佛國 Grenoble に生れ、スミスの卒去に先つこと十年即ち千七百八十年八月三日 Bagnoy 近傍の Flux に於て六十五歳にて歿したり。氏は Mureaux の修道院長たり。氏は經濟學者としてよりは寧ろ哲學者として一層高名にして、唯覺論派 (l'école sensualiste) の泰斗にして *Traité des sensation* の著あり。氏は往々自然法則學派に屬すと思考せらるれども、實は獨立の地位を有し、其經濟の自由を主張するは自然法則學派並にスミス派と共通なれども、自然法則學派が農業のみを以て生産的と爲す所の偏見を脱して、商業及び工業の同じく重要なるを力説したるは、スミスに比して遜色あるを見ず。要するに氏の「商業と政府」なる著書の全體を以てスミスの「國民の富」の全部と比較したらんには、兩者の經濟學史の地位に著るしき差等あるは論を踈たすと雖も、若し余が次章以下に譯出せんとする氏の價值説を把り來りてスミスのこれと對照したらんには、後者の遙かに前者に及ばざるものあるを見るべきなり。

スミス氏の著書は、氏の生前に於て五版を重ね（一七七六年、一七七八年、一七八四年、一七八六年、一七八九年）たるのみならず、引續き歐洲各國の語に譯せられ、佛國に於ては千七百七

十九年より千八百二年に至る二十年間に於て四種の譯書を出したりと云ふ。然るにコンデヤック氏の著書は前述の如く千七百七十六年に於て初版を和蘭のアムステルダム府にて出したる外は、巴里の書肆 Guillaumin 會社が千八百四十七年「經濟學雜集」(Mélanges d'économie politique)の第一卷中に Hume, Forbonnais 二氏の次、Condorcet, Lavoisier et Lagrange, B. Franklin 諸氏の先に此著書を掲げたるを見るに止まれり。スミス氏の書が弘く世に行はれたるは固より其所なりと謂ふを得べしと雖も、コンデヤック氏の書の多く世に知られざるは、實に偶然の不遇不幸と謂はざるを得ず。余は今スミス氏の生誕二百年を祝祭するに方り、氏と同時代の不幸なる學者コンデヤック氏を紹介する所以は、敢て異を立て奇を好むに非ず。スミス氏の學說中最も不完全なりと思考せらるる部分特に價值説に就ては、後世の學者例へばジュヴォンス氏カール・メンガー氏等の如き之を補正して殆んど餘す所なきが如しと雖も、實にスミス氏の同時代に於て既にコンデヤック氏の在る有りて、後世の學說に先鞭を著けたるを見、而もスミス氏は其生前にコンデヤック氏と相識らざりしを思ふ時は、余が茲にコンデヤック氏の説を掲げてスミス氏の説と對照せんとするは、抑も亦スミス氏の遺志を遂ぐる所以なるべし。夫れスミス氏の「國民の富」は氏が替て佛國に旅行せる際會見せる自然法則學派の感化に負ふ所渺からざりしは既に述べたり。若し氏にしてコンデヤック氏に會見し價值説に就て意見を交換したらんには、スミス氏の得る所、蓋し大なりしなら

む、而して之と同時にコンヂャック氏のスミス氏より受けし所も亦小ならざりしならむ。

第二章 スミスの價值及び價格説の要領

前に述べたる如く、スミス氏の書は歐洲各國語に譯せられ、又邦語にも譯せられ、且氏の諸説は顯る人口に膾炙せるが故に、余は茲には只氏の價值及び價格説の要領を擧ぐるに止め、而して次章に於ては反對にコンヂャック氏の説を成るべく詳細に紹介する所あらむと欲す。

スミス氏に依れば、價值に二の意義あり、其一は或物品の效用を指し、其二は人或物品を所有するとき、之を以て他の物品を購買し得る所の力を指す。前者は之を使用價值 (value in use) といひ、後者は之を交易價值 (value in exchange) といふ。最も大なる使用價值を有する物が、特としては小なる交易價值を有し、又は全く之を有せざることあり。例へば水の如きは前者の例にして、金剛石の如きは後者の例なり。(國民の富、第一卷第四章)

スミス氏の謂はゆる使用價值は略ぼ今日の經濟學者の謂はゆる效用 (utility) 又は主觀的價值に同じ。今日の經濟學者は、效用と交易價值との密接なる因果關係を認めて詳細なる説明を爲せども、スミス氏は使用價值と交易價值とを全然無關係か若くは相背反せる觀念の如くに取扱ひ、且一度此區別を爲したる後は、使用價值の問題は之を高閣に束ねて、單に交易價值のみに就て、言

説を費やしたるは氏の價值説の第一の缺點と謂はざるを得ず。此點に就て氏はコンヂヤック氏に一籌を輸するものと謂ふべきなり。此缺點は更に氏をして二の迷路に彷徨せしむるを致したり。其

一は社會主義をして追跡せしめ、其二は經濟學者をして再び蹈ましめたるものなり。

スミス氏は交易價值の測度を指して價格 (price) と稱したり。氏は實際の價格即ち市場價格 (market price) が絶えず變動する事實に着眼し、斯の如く常に變動する價格は眞の價格に非ず。

眞の價格即ち自然的價格 (natural price) は一の瞬間より他の瞬間に、又は一の場所より他の場所に於て直に變動することなきものなりと思考し、第一に次の假説を生みたり。曰く「各物の眞の價格即ち各物がそれを得んと欲する人に眞に直打する所のものはそれを得ることの勞苦なり……故に勞働はすべての物の交易價值の眞の測度なり」と (第一卷第五章)。此考は勞働即ち一の物を生産するに要したる勞苦を其物の交易價值の原因と爲し及び其測度と爲すものにして、後世カール・マルクスの探る所となりたるものなり。

此第一の假説に就て忽ち起る疑問はスミスは如何に價值の根原及び測度たる勞働を測るやと云ふこと是なり。何となれば、勞働に難易の別あり、又職業の練修に要する年期に長短の差あるべく、従て困難なる勞働又は練修に長期を要したるもの、一時間は容易なる勞働又は練修に只短期を要したるもの、一時間と比較すべくもあらず、而も此勞働の困難と熟練との正確なる測度を發

見するは決して容易ならざればなり。但し此點はスミスの既に自覺したる所なり（第一卷第五章）。故に氏は曰く『縱令勞働はすべての貨物の交易價値の眞の測度なりと雖も其等の價値の通常測らるるは勞働に依らず。二の異なる勞働の量の間の比例を確知することは往々困難なり……實に異なる種類の勞働の異なる生産物を互に相交易する場合に於ては、勞働の難易と練修の長短との兩者を通常目算に入るものなり。而して此目算は正確なる測度に依るに非ず。たとひ正確ならずとも、通常生活の業務を行ふに足る所の粗畧なる平等の種類 (That sort of rough equality which, though not exact, is sufficient for carrying on the business of common life) に従ふ所の掛合ひ及び取引 (higgling and bargaining) に依るものなり』云。由是觀之、スミス氏が勞働を以て價値の眞の根原及び測度と爲す考は、實際の事實には多く適合し難き曖昧模糊なるものなるを知るべきなり。

次に起る難問は文明社會に於ては、勞働のみを以てしては物を製作するに不充分なる事是なり。即ち勞働の外に土地及び資本を要し、而して土地及び資本は之を無償にて使用するを得ず。而して此點は亦スミス氏の認めたる所なり。（第一卷第五章）。

是に於て、スミス氏は更に第二の假説、即ち交易價値は生産費に従ふとの考を立てたり。氏は直ぐ前には勞働に基く所の價格を眞の價格 (real price) なりといひ、直ぐ後には生産費に由りて

測られたる價格を自然的價格 (natural price) なりといふ。前には勞働を以て交易價値の唯一の原因及び測度となし、後には生産費即ち勞賃、地代、及び利潤 (profit of capital) を以てす。而して前述第一の假説が社會主義の探る所となりたるに反して、此第二の假説は後世の經濟學者即ちジエヴォンス氏より以前の正統學派の重に採る所となりたり。夫れ斯の如く、スミス氏は二種の異りたる假定を交番に立てて、曾て其何れかに決定するを敢てせず。従て氏の著書中に他の數多の矛盾なる説を生ずるに至りしもの如し。例へば或處にては資本及び土地を以て勞働と共に新なる價值成立の根源なりと爲し、又他の處にては利潤及び地代を以て資本主及び地主が勞働のみの生産したる價值より引出したるものなりと爲す。此考は恰も社會主義者の説に似たり（第一卷第六章）。斯の如きスミス氏の矛盾は先儒の既に屢々指摘したる所なり (Gide et Riis, Histoire des doctrines économiques, 4^e éd. 1922. p. 87-91)。然れども要するにスミス氏の二個の假説中、生産費説が優位を占むる如し。スミス氏は生産費に一致する所の價格を物品の自然的價格と名け、市場價格は供給せられたる分量が需要せられたる分量に比して減少するか又は増加するかに従ひて或は自然價格を超へ、或は之より下るものなりと思考したり。

スミス民の生産費に對する難點の重なるものを擧ぐれば、氏は貨物の價格を其生産費を成す所の諸給付の價格（即ち勞賃、利潤、地代）に由りて説明し、而して更に此等諸給付の價格を貨物の

價格に由りて説明するは畢竟循環論法たるを免かれざることは是なり。實にスミス氏は勞賃の額の一部は勞働者の生計必要品の價格に従ふものなるを説けり。

夫れ斯の如くスミス氏の價值及び價格に對する學説は種々の矛盾及び短處を有するものなり。而して其然る所以のものは蓋し價值の根源を效用に置かずして、之を勞働又は生産費に置きたるに在るもの如し。コンヂャツク氏の説の氏に比して優れる所以は亦茲に在り。請ふ次章に於て之を紹介する所あらむ。

第三章 コンヂャツク氏の價值及び價格説

コンヂャツク氏の「商業及び政府」は二大部に分たれ、第一部は三十章に、第二部は十九章に分たる。而して余か茲に譯出して氏の説を紹介せんと欲するは第一部の始めの三章に限れり。其第一章は物の價值の根本を説き、第二章は物の價格の根本を論し、而して第三章は價格の變動を解明せり。此他第二十章は再び物の眞の價格 (*vrai prix des choses*) に就て、第二十一章は獨占 (*monopole*) に就て説く所あり、前掲諸章と密接の關係あれども、時と紙との都合上之が紹介を他日に譲りて、茲には譯出せず。且茲に譯出する所の部分も往々意を取りて文を約め又は敷衍したる所あり、讀者幸に之を諒せよ。

第一　物の價値の根本

例へば茲に獨立せる一群の土民あり、他の土民とは孤立して未だ交通せず、只其耕作する田野の生産物のみに由りて生活しつゝあり。今彼等が第一回の收穫を爲したるが、其中より播種に要する量を除きて、猶百石（原文には *hundreds* とあり假りに石と譯す）の小麥を餘せり。此殘餘を以て、次の收穫期まで缺乏の心配なしに生活し得べしと假定す。

此假定に於て、小麥の量が缺乏の心配なき爲には、其量が啻に彼等の欲望（糊口の）を實際満すに足るのみならず、彼等の心配を除くに足るものなるを要す。換言すれば、小麥の量が充分の或る程度に在ることを要すべし。蓋し缺乏の心配なしと判斷する爲には、決して只嚴格に足るといふ程度のものに非ずして、幾分か潤澤であり充分であることを要するなり。

前例に於ては播種用の量を除きて殘れる百石の小麥は此土民が次の收穫期迄缺乏の心配なしに生活し得る量なりと假定したり。故に若し彼等が其上に若干石を有つならば、彼等は過剰の地位に在りといふ可く、之に反して、假定の百石より少量を有つならば、彼等は缺乏の地位に在りといふ可きなり。

若し一の民衆が正確に其所有する小麥の量と彼等の消費に要する量との比を判斷し得るとき

は、此知られたる比は、同様正確に彼等が充分か過剰か又は缺乏かの何れかの地位に在ることを常に彼等に示すものなり。

然れども彼等はこの比を正確に判断するを得ず。何となれば彼等は小麥の分量並に彼等が之を消費するに要する分量を的確に定むべき何等の手段を有せざればなり。況んや彼等は小麥を減損なしに貯藏すること能はず、又此減損の量を正確に豫知すること能はざるに於てをや。故に彼等が判断し得るは唯概算に止まり、又數年來の經驗を基礎とするものに止まる。されば、如何様に判断するにしても、彼等が缺乏の心配を全く無くす丈多くの小麥を有すと考ふる時は充分の地位に在りと信じ。彼等の總ての心配を無くす丈より以上を有すと考ふる時は、過剰と信じ。彼等が浪費 (dissipate) するには不足なる分量を有するに過ぎすと考ふる時は、不足と信するものなる事は常に眞實なりとす。

由是觀之、充分か、過剰か、又は缺乏かを定むるものは小麥の分量よりは寧ろ此分量に對する人の意見 (opinion) に在りと謂ふ可きなり。但し此三者が意見として現はるるは唯此三者が分量の大小に従ひてそれ／＼想像せらるるが爲なり。

若し此土民が播種用を除きて百石の小麥を有する代りに二百石を有するならば、彼等は次の收穫期までの消費に向て百石丈不用の小麥を有することとなる。若し彼等が此過剰なる小麥を保存

する注意を取らぬならば、之を蒸らし又は腐らしむるなるべし。斯くして此等の餘分のものは竟に次の年々に向て何等の用途に供せられず了るならむ。故に豊作が數年續くときは土民は唯無用なる過剰の小麥を持餘することとなり、遂には土地に播種する分量を少くするに至るべし。

然れども收穫が往々其人民の需要を充すに不充分なること有るを以て、彼等は豊年の時に小麥を貯藏するの必要を感じるに至る。斯くして其豊年の時に不用のものが、凶歉の年に必要となるなり。從て貯藏せる白石の小麥は數年間凶歉が續きし場合、例へば年々播種用を別として六十石か八十石かの收穫ありしに過ぎざる場合を埋合すことを得るなり。

蓋し人が小麥を貯ふことを知りたる時には、小麥の過剰といふ事は最早これ無しと謂ふべし。何となれば人が此年に於て消費せずとも、他の年に之を消費するを以てなり。

若し此土民が他の諸土民に圍繞せられたるとき、而も皆農を本業とする時は、此土民は小麥を倉に貯ふる必要を前と同様に有せざるに至るべし。何となれば此等の諸土民は交易に依りて有無相通するを得ればなり。然れども本問題に於ては余は此土民を全然孤立せるものと假定せり。故に此有無相通するといふ事は問題外なり。

凡そ人類は二種の欲望を有す。一は人類の身體の組織に向ての欲望にして、換言すれば吾人の生命を維持する爲の欲望なり。二は慣習に本づくものにして、必ずしも生命の維持に向て必要な

るものに非ず。余は前者を自然的欲望(les besoins naturels)といひ、後者を人爲的欲望(les besoins factices)といふ。

今茲に漂泊せる民族あり、彼等は野生の果實や其漁獵せる魚獸に依りて生活す。而して其遍歴せる一の場所が最早其生活資料を充分に供給せざるに至るときは、更に他の場所に移動す。此生活状態に於ては、吾人は唯其單純なる自然的欲望あるを見るのみ。

然れども余が前に假定せる土民は最早漂泊すること無く、其擇みたる場所に於て生活せんと欲せり。彼等は其耕作せる田畝の收穫の豐稔ならむことを欲し、又彼等の勞働の結果の良好ならむことを欲す。彼等は衣食の料を得んが爲に、野獸を獵ることを以て満足せずして、寧ろ牛羊を牧畜し、彼等の消費の爲に充分に之を蕃殖することを勉む。此生活の種類こそは、謂ゆる人爲的欲望に答ふるものなり。即ち習慣より生ずる欲望にして、其習慣は之を吾人が擇める手段に依りて、自然的欲望を満足せしむる所のものなりとす。

此土民の初めの人爲的欲望は、自然的欲望と相距る甚だ遠からざるものなり。然れども此人爲的欲望は益々進歩發達して、自然的のものと益々離隔するに至るを豫想し得べし。即ち此土民が技藝の進歩を爲して、彼等の自然的欲望を満す爲に、益々複雑巧妙なる方法を以てするの時節は漸々に到來すべきなり。是に於て、種々の人爲的欲望が自然より離隔する爲に、全然自然を變化

し、且之を改悪 (corrompre) するに至ることあるべきなり。

此土民の起せる始めの諸欲望は、社會秩序の本質を成す。此等諸欲望が無くなれば社會秩序も亦失はる。蓋し此等欲望は、たとひ漂泊せる蠻民に向ては自然的といふを得ずとも、社會に於ける人 (l'homme en société) に向ては絶対的に必要なる所の自然的欲望といひ得べきなり。此理由に本つき、余は今後畜に吾人の生命維持に必要なもののみならず、文明社會の構成に缺く可からざる所の諸欲望をも、自然的と名くべし。而して余は人爲的 (artificiel) なる語を以て、社會秩序 (l'ordre social) に重要に非ずして、従て之れ無くとも文明社會は存在し得る所の諸欲望を意味すべきなり。

凡そ一の物が吾人の何等かの欲望を充すを得る時は、之を有用なりと謂ひ、物が何人の役にも立たず、又は吾人が之を以て何をも爲すこと能はざれば、之を不用なりと謂ふ。

吾人は此效用 (l'utilité) の大小を測るものなり。即ち吾人は物が吾人のそれを用ゐんと欲する事に適する度合を判断するものなり。此判断即ち見積 (estime) は吾人の價值 (valeur) と稱するものなり。一物が價值を有つといふことは、他なし、其物が或る用途に適ふといふことなり、又は適ふことを吾人が見積るといふことなり。

諸物の價值は其效用に本づく。換言すれば吾人がそれに就て有する欲望に本づく。更に換言す

れば、吾人がそれに就て爲し得る用途に本づくものなり。

前例の土民が新なる欲望を起すに従ひ、彼等が物に就て新なる用途を發見するに至り、斯くして前には價值なかりし物も、後には價值を有するに至るべし。

凡そ物が充分有る時は、不足の心配なきが故に慾望を感ずること小なり。反對の理由に依り、稀少の場合及び缺乏の時には、慾望を感ずること大なり。

夫れ諸物の價值は慾望に本づく故に、大に感ずる慾望は物に大なる價值を附與し、少しく感ずる慾望は物に小なる價值を附與するは當然なり。約言すれば、諸物の價值は、其稀少の時に増大し、其豊富の時に減少す。

物の價值は、其豊富の度、愈大なれば愈減して、遂に零に達する迄低下し得べし。例へば過剰の時、人が何等の用途を見出し得ざるに於ては、其物は全然價值なし。何となれば此場合に其物が全然不用なればなり。

斯の如き小麦の過剰といふことは、人がそれを消費に必要な量の一部を爲さざる年に就てのみ考ふるときに、始めて之れ有るべけれども、若し人が次ぎに来る年々即ち收穫が必ずしも充分なるを得ざる年々に就て考ふるならば、其小麦は人の慾望の必要なる量の一部を成すべきが故に、價值を有すべきなり。

此慾望は隔たりたる慾望と謂ふ可し。従てそれは現在の慾望が與ふると同一の價值を物に與ふることなし。現在の慾望は、現實に物が必要なることを感せしむれども、未來の慾望は、只物が必要となるべしと判斷せしむるに過ぎず。吾人は往々物が未來に斯くならざるべしと妄想す。而して、斯かる臆測の下に人が未來の慾望を豫見せざるが故に物に對して僅かの價值を與ふることなるなり。

効用が同じければ、價值の大小は、若し分量の稀少か豊富かの度が正確に知られ得るならば、此度に依りて定まるべし。而して此時は人は眞の價值を物に與ふべし。然れども此度は決して常に知られ得るものに非ず。此度は主として吾人の意見に従ふものにして、而も此意見に本づきて價值の大小は定まるものなり。

今假りに此土民の消費に要する小麥の量の十分一が不足すとせば、若し人が此缺乏を認識し、且それが只十分一のみなることを確知するならば、此小麥の十分九は只十の價值を有するに過ぎざるべし。

然るに事實は斯の如きを得ず。人が豊富の時に自負する如く、缺乏の時には甚だ憂慮す。故に只十分一の不足の時には、人は十分二、十分三、又はそれ以上と判斷す。人は或は小麥が全然缺乏するの時あるを考ふ。従て十分一の不足は、それが三分一又は二分一にも均しき恐怖を惹起す

るなるべし。

斯の如く人の意見が不足を過大視するときは、小麥を所有する人々は之を保存するを勉むべく、而して不足の心配は彼等をして、其必要とするより以上を貯藏せしむべし。斯くして土民の一部に對して不足が實際に起ることとなるべし。此状態の下に於て、小麥の價値は、意見が缺乏を過大視する度合に比例して騰貴するは明かなりとす。

若しも諸物の價値が諸物の效用に本づくならば、效用が同一に止まるるとき、其等の價値の大小は、其等の稀少が豊富かに本づく、又は寧ろ其等の稀少か又は豊富かに就て吾人の有する意見に本づくものなり。

余は、效用が同一に止まるるときと言へり、蓋し、諸物が同じく稀少なるか又は同じく豊富なりと假定すれば、人は其等の價値の大小を其等の效用の大小に應じて判斷するものなるは人の皆能く知る所なり。

茲に何人も甚だ必要なりと思考せらるれども而も價値を有せざるが如く見ゆるものあり。其著るしき一例は水なり。人は曰く、水はどこにも在り、之を得る爲には何をも要せず。運搬に依りて水が受く可き價値は、水の價値に非ず、それは只運搬の費用の價値に外ならずと。扱人が何等の價値なき物を得る爲めに、運搬費用を拂ふといふ事は、豈驚く可きに非ずや。

故に余は斯く言はんと欲す。河岸に於てすら水は一の價值を有す、但しそれは至て小なり、何となれば水は其所に於て、吾人の欲望に向つて無限に過剰なればなり。反對に、乾燥せる地方に於て水は大なる價值を有す。而して人はそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見積るなり。之と同様の例を擧ぐれば、一の渴したる旅人が水一杯に對し百錢を與ふ、而して此水一杯は百錢を價す。價值は物の上よりは、寧ろ吾人の爲す見積りの上に在るが故に、而して此見積りは、吾人の欲望に比例的なるが故に、價值は吾人の欲望が或は増し、或は減するに従ひて、或は上り或は下るものなり。

人は諸物が何等の費用を要せざる時に、價值なしと判斷する如く、人は諸物が金を要せざる時に其等を費用の要らぬものと判斷すべし。請ふ余をして此事を明瞭ならしむる爲に更に精確に考ふる所あらしめよ。

たとひ人は一物を得る爲に、金を與へぬとも、若し其物が勞働を費やすを要するならば、それは費用が要ると言ひ得べし。

抑も勞働とは何ぞや。曰く、一の便益(advantage)を得る目的を以て爲さるる所の一の行爲又は諸行爲の引續きなり。世間には、無職業者の如く、何等定まりたる勞働を爲すことなくして、行動しつゝ居る者もあり。然れども勞働者なるものは人の欲望する所の物を生産する爲に行動す。

余の庭園に働く所の雇人は余が彼に約束したる賃金を得る爲に行動す。而して彼の勞働は鋤の第一撃より始まることを注意すべし。何となれば、若し此第一撃より始まらぬならば、彼の勞働の始まれる所を何人も知ること能はざる可ければなり。

この第一の考察に従ひて、余は謂へらく、余が川より遠く隔たりて居る時に、水は之を汲みに行く行爲を要すべし。其行爲は即ち勞働なり、何となれば其行爲は余の欲望する一物を得んが爲めに爲さるるが故なり。而して余が川の岸に居る時は、水は之を得るためには只余の身を屈めるを要するのみなれば、其行爲は至て小なる勞働なりと認め得べし。前述の鋤の一撃よりは小なる勞働なり。然れども、水は其時又至て小なる價值を有すべきなり。

されば、水は余の所へそれを持來るに要する勞働を直打すべし。若し余が自身に水を取りに行くを欲せざるならば、余は余の爲にそれを取り來る人の勞働に報ゆるなるべし。故に水は余が與ふる賃金を直打すべし。從て運搬費は水に對する一價值となるべし。余は余自身、水に此價值を與ふ、何となれば、余は水が運搬諸費を直打することを見積るが故なり。

若し余をして、空氣は一の價值を有すと言はしめば、人は定めて驚くならむ。然れども余は論理的に説明するに於ては、斯く言はざる可からず。然らば空氣は何を直打するか、曰く空氣は余が之を呼吸し、之を交代し、之を新鮮にする爲になしたる所の總てを余に直打するなり。余は窓

を開き、又は外出す。此等の行爲は皆勞働なり、實に至て輕微なる勞働なり。何となれば、空氣は水よりも一層豊富にして、唯至て微少なる價值を有し得るか爲なり。

余はこれと同一の事を 太陽が遍ねく地球の表面に擴布する所の光線に就ても、言ひ得べし。何となれば此光線を吾人の總ての用途に供する爲には、實に勞働若くは金を要すればなり。

反對論者は、余が效用を以て價值の基礎と爲すことを誤謬なりと爲せり。曰く、一物は、稀少の或度を有つに非ざれば價值を有つを得ずと。此稀少の或度 (*un certain degre de rarete*) なる語は、甚だ曖昧なり。余の見る所を以てすれば、一物が稀少なりといふ事は、吾人が吾人の用途に要する丈多くを有たぬと判斷する時に在り。又一物が豊富なりといふ事は、吾人が吾人の要する丈多くを有つと判斷する時に在り。又一物が過剰なりといふ事は、吾人がそれ以上を有つと判斷する時に在るなり。之を要するに、人が何とも爲さぬ物、又は何とも爲し得ぬ物は決して價值を有せず。之に反して物は效用ある時は價值を有すべし。而して若し物が只効用あることに依りて、價值を有せぬならば、其物は稀少の時にも大なる價值を有せざるなる可く、又豊富の時にも小なる價值を有せざるなる可し。

然るに人は往々價值を以て、吾人の與ふる所の判斷より獨立して、諸物の固有する所の一の絶對的性質なりと思考す。此不正確なる考は、誤謬なる推理を引起すものなり。茲に注意すべきは、

た。と。ひ。諸。物。は。吾。人。の。用。途。に。適。す。る。性。質。を。有。つ。に。由。り。て。の。み。始。め。て。價。値。を。有。つ。べ。し。と。雖。も、若。し。吾。人。が。諸。物。の。此。性。質。を。有。つ。こ。と。を。判。斷。せ。ざ。る。に。於。て。は、諸。物。は。吾。人。に。向。て。何。等。の。價。値。を。有。せ。ざ。る。べ。き。な。り。故。に。諸。物。の。價。値。は。主。と。し。て。吾。人。が。效。用。に。就。て。の。判。斷。の。上。に。在。る。な。り。而。し。て。只。吾。人。が。諸。物。の。效。用。の。大。か。小。か。を。判。斷。す。る。に。由。り。て。の。み、諸。物。の。價。値。が。大。又。は。小。と。なる。もの。な。り。又。同。一。の。效。用。の。場。合。に。は、只。吾。人。が。諸。物。の。稀。少。か。豊。富。か。を。判。斷。す。る。に。由。り。て。の。み。諸。物。の。價。値。が。大。又。は。小。と。なる。な。り。余。は。只。此。考。が。余。の。此。著。書。の。全。體。の。基。礎。と。なる。が。故。に、特。に。此。考。に。就。て。多。言。を。費。や。した。る。な。り。

第二 物の價格の根本

茲に甲乙二人あり、甲は小麥を過剰に有ちて、葡萄酒を有せず、乙は反對に葡萄酒を過剰に有ちて、小麥を有せず。而して甲に不要且過剰なる小麥は乙に必要にして、乙に向ては過剰且不要なる酒は甲に必要なりと假定す。此場合に兩人は交易を爲さんと欲すべし。即ち甲は乙に麥を提供し、乙は酒を提供して、互に相交易せんとすべし。

若し甲の過剰が恰も乙の消費に向て必要にして、乙の過剰は恰も甲の消費に向て必要ならば、二人は相互に交易することに由りて、共に利益を得べし。何となれば、二人は各々其不要の物を

與へて、欲望する所の物を得ればなり。此場合に甲は其小麥が乙に向て直打する所は、恰も乙の酒が甲に向て直打する所と同じと見積り、乙は其酒が甲に直打する所は恰も甲の小麥が乙に直打する所と同じと見積るなり。

然れども、若し甲の過剰は乙の消費に向て充分なれども、乙の過剰は甲の消費に向て不充分なるときは、甲は其總ての過剰を乙の過剰に對して與へざるべし。何となれば甲が乙に與ふる物は乙に多くを價ひし、乙の甲に與ふるものは甲に少しを價ひすればなり。

斯くして、甲は乙に其小麥の過剰の總てを與へず。甲は其の得んと欲して、而も乙が與ふを得ざる酒の分量を他人より得んが爲に、其の小麥の過剰の一部分を留保するなるべし。

乙に就て見れば、乙は其酒の過剰を以て彼の消費に要する小麥の總てを得ざるべからず。故に若し甲が乙に與へ得る所の小麥が乙に不充分ならば、乙は其酒の過剰の總てを甲に與ふることを拒むるべし。

此爭論の下に、乙は多量の小麦に對して彼の能ふ丈少量の酒を提供し、甲は多量の酒に對して彼の能ふ丈少量の小麦を提供するなるべし。

斯くする間に、二人の欲望は二人をして必ず或る決定を爲さしむるに至るべし。何となれば乙は小麦を要望し、甲は酒を要望すればなり。

扱乙は甲の欲する酒の總量を甲に與ふることを欲せず、又與ふるを得ざるが故に、甲は稍少き消費を爲さんと決心すべし。而して乙は又小麥に就て其消費せんと欲したる量を減せんとするべし。斯くして漸々に二人は協定に近づくなるべし。甲は小麥の稍多量を乙に與へんとし、乙は甲に酒の稍多量を與へんとすべし。而して相互數回の提議の後二人は遂に意見の一致を見るに至るべし。例へば二人は一樽の酒と一俵の小麥とは其價値を等くすとの協定に達するなるべし。

二人が相互に提供を爲す時には、互に値切り合ふべく。斯くして意見の一致に達したる時に取引は行はるべし。扱二人は一俵の小麥の乙に値する所は恰も一樽の酒の甲に値する所と同じと見積りたり。

二人が小麥を酒に比べて爲し、又酒を小麥に比べて爲す所の此見積りは、謂ゆる價格(Price)なり。即ち乙の酒の一樽は、甲に向ては、甲の小麥の一俵の價格なり。甲の小麥の一俵は、乙の爲めには、乙の酒の一樽の價格なり。

今二人は相互に小麥及び酒の價値の何たるかを知れり。何となれば、二人は此等の價値を二人の有し且共に知る所の欲望に由りて見積りたればなり。而して尙ほ二人は此二種の物品が他の人々に對しても亦一の價値を有することを知るならん。何となれば、二人は他の人々も亦此等の物品に對して欲望を有つことを知ればなり。然れども此欲望は二人の考へるよりは、蓋し或は大

なることあり、又は小なることあるべし、故に彼等が二人にそれを告げざる限りは二人は正確に彼等が賦與する價值の何たるかを判断すること能はざるべし。然らば彼等は如何にしてそれを二人に告ぐるかといふに、それは彼等が二人と共に、及び彼等の間に爲す可き交易に由りて告ぐべきなり。斯くして總ての人々が一般に若干の小麥に對して若干の酒を與ふることを同意したる時に、始めて小麥は酒に比し、又酒は小麥に比して、一般に總ての人より認めらるゝ一の價值を有つに至るなり。

交易に於て、一般に認めらるゝ此關係的價值は諸物の價格の基本となるなり。故に價格とは、一物に就て見積れる價值を他の物に就て見積れる價值に比したるものに外ならず。即ち一般にそれ等の物に就て、交易を爲す人々の總てに依りて一般に見積られたるものなり。

交易の下に於て、諸物は決して絶對的價格 (*in prix absolu*) を有せず。只吾人が取引を結ぶ瞬間に於て吾人が爲す所の見積りに對する關係的價格 (*in prix relatif*) を有つのみなり。而してそれ等の物品は相互に他の物品の價格となる。

第一に、諸物の價格は、吾人が爲す所の見積りに比例的なりとす。一層適切に言はば、それは、一物に就て吾人が他人に比して爲す所の見積りに外ならず。而して此事たる決して怪むべきに非ず。何となれば、始めより價格 (*prix*) と見積り (*estime*) とは同意味の詞なればなり。又價格なる

語の元來の意味は今日見積りなる語の示す所の意味なればなり。

第二に、諸物は相互に價格なり。甲の小麥は乙の酒の價格なり、而して乙の酒は甲の小麥の價格なり。何となれば、二人の間に行はるる取引は、恰も乙の酒が甲に向て有つ所の價值と同じものを、甲の小麥が乙に向て有つことを二人が見積れるに至る一の協定なればなり。

此價格と價值との二語は之を混同すべからず。又常に此二語を互に無關係なるかの如くに使用するも亦不可なり。

吾人が一物に對して欲望を有つ故に、其物は價值を有つなり。其物は只それ自身に於て、而かも交易を爲すといふ問題の起る以前に於て、苟も吾人の欲望する所の物なる以上は價值を有するなり。

反對に、物は吾人が交易を行ふ時に於てのみ價值を有つものなり。何となれば、吾人は物を他の物と比較するに當り、只それを吾人が交易せんと思ふ丈に見積るに過ぎざればなり。而して其價格は、既に言へる如く、交易の下に吾人が其價值を他の價值と比較する時に、吾人が其價值に就て爲す所の見積りなり。

故に價格は價值を假定す。是れ此二語の往々混同せらるる所以なり。但し場合に依りては、此二語が一樣に用ひらるることあり。然れども、本來此二語は混同すべからざる二つの意義を示す

ものなり。而して之を判別することは、以下余輩が爲さんと欲する議論の展開の上に、錯誤を避くる爲に甚だ要用なり。

第二 價格の變動

余輩は價格は價值に本づくことを説明したり。而して此價值なるものは變動す。従て、價格も亦變動すべし。變動に種々の原因あり。

第一 豊富と稀少とは價格を價值の如く變動せしむ。而して價格を欲望の大小に比例して變動せしむるものなり。

第二 諸物の價格は人民が同じ豊富又は同じ欲望を有つ場合に於ても變動し得るものなり。

收穫後に於て、余は穀倉に過剰なる小麥を有し居れり。而るに之に反して、過剰なる酒は、皆余の小麥を欲望する十二人の酒倉に分配せられて存在すと假定せよ。

此假定の下に於て、此十二人が余の小麥に對して、彼等の酒を交易せんとして來れり。而して前年に於て余は一樽の酒に對して一俵の小麥を與へたる故に、彼等の各は一俵に對して一樽を提供す。然れども、前年に於ては、余は只一人のみを取引して、多くの小麥を與へざるを得ざりしと雖も、今日は余は十二人と取引す。而して余は彼等が賣り放たんとする酒の總ての量を欲せざる

より、余は余に成る可く多くの酒を興ふる人にのみ小麥を興ふべきことを告ぐべし。斯くして余は彼等をして余に取り利益ある申出を競ふて爲さしむるを得べし。其結果、余の小麥は彼等に向ては前よりは高くなり、彼等の酒は余に向ては安くなるべきなり。

若し過剰なる小麥が十二人の穀倉に分配せられて存在し、反對に過剰なる酒の總量は一人の酒倉に貯へらるると假定するときは、此時は、價格は決して第一の假定の時の如くなるを得ずして、小麥の價格は下り酒の價格は上るべきなり。

數多の人が各所有する一の貨物を賣らんと欲する時は、此競争は其價格を下ぐべし。而して競争無ければ、彼等の賣らんと欲する貨物の價格を上ぐべし。故に競争が場合により、大か小か又は絶無かに從ひて、價格は或は下り又は上るなり。

此價格の變動は、謂ゆる絶對的價格なるものの有り得べからざる事を明證するものと謂ふ可きなり。凡て吾人が價格を高しといひ、又は之を低しといふは、吾人が交易せらるべき二貨物を互に相比較していふに外ならず。例へば若し余が多量の小麦に對して少量の酒を興ふるときは、酒は小麦に比して高き價格を有つと謂はれ、小麦は安き價格を有つと謂はるるなり。反對の場合に於ては、小麦の價格は高く、酒の價格は低しと謂はるるなり。

第四章 結 論

余は第二章に於てアダム・スミス氏の價值及び價格に關する説の概要を述べ、第三章に於てコンヂャック氏の著書の中、價值及び價格を論ずる部分を譯出したり。既に述べたる如くスミス氏の「國民の富」は諸外國語及び邦語に譯されたる者多く、且氏の説は百數十年來學者並に其他の人々の耳目に熟せる所なりと雖も、此書と恰も年を同ふして刊行せられたるコンヂャック氏の「商業及び政府の關係」は、少くとも價值價格の原理に關しては、スミス氏の説よりは遙かに優秀のものなるにも拘はらず、其書は版を重ねるを見ず、又佛國以外の國語に翻譯せられたるを耳にせず。是れ余がスミス氏に簡約にしてコンヂャック氏に詳密に、而かも其數章の全文を譯出したる所以なり。

若しコンヂャック氏の説を取りて、スミス氏の説と對照比較せば、兩者の差異及び長短は明々白々たるものあり。スミスが労働又は生産費を以て價值の根本と爲すに對し、コンヂャックは效用を以て價值の根本と爲す。スミス氏が労働と生産費との二岐路に彷徨して、頗る曖昧矛盾の態度を有するに對して、コンヂャック氏は效用の見積りといふ鮮明なる旗幟を樹て、正々堂々と進軍するの狀は、讀み去り讀み來りて特に痛快を覺ゆるものあり。

ごもコンチャック氏は決して單に效用のみを見て、價値の大小を決定すべき其他の要件を外視するものに非ず。氏は諸物の價値は欲望に本づくとの大主意より論歩を進め、諸物の價値は、其稀少の時に増大し、其豊富の時に減少すといひ、又更に一步を進めて、物の價値は、其豊富の度愈大なれば愈減じて、遂に零に達する迄低下し得べしといへり。此説は後世碩儒ジェヴォンス (W. S. Jevons) 等の最終效用説に髣髴たる所の卓見なりとす。若し之を以てスミス氏の水は使用　れごも交易價値至て少く、金剛石は使用價値小なれごも交易價値大なりと謂へる説と對照すれば、明晦深淺、固より同一の談に非ざるなり。宜なる哉ジェヴォンス氏かコンチャック氏を以て original and profound と贊稱せること。

コンチャック氏が現在の欲望と隔たりたる欲望との説明は、實に後世の碩學特に Böhm-Bawerk 等の現在財の價値は未來財の價値より大なりとの新説を夙に胚胎するものと謂ふ可し。

氏は效用を主とし、生産費を従とす。此點は氏が水、空氣、日光の諸例を擧げたる所説に徴して明瞭なり。蓋し氏の考に從へば、乾燥せる場所に於て人が一杯の水に對して百錢を與ふは、之が運搬の費用に百錢を要したるが爲に由らず、彼の水に對する欲望、換言すれば水の效用が、百錢の運搬費を直打すと見積りたればなり。

之を要するにスミス氏の價値價格説は客觀的と謂ふべくして、コンチャック氏の説は主觀的と

謂ふべきものなり。顧ふに古來の學者の價值説は此主觀と客觀との二大派に分別し得べく、而して客觀派の代表者としては夙に第十三世紀に於て Albertus Magnus (A. D. 1193—1280) 及び其門弟の Thomas d' Aquino (1225—1274) あり。降りて第十七世紀に至りて William Petty (1623—1683) あり。アダム・スミス氏亦此派に屬し、而して氏の後に於ては David Ricardo は實に此派の驍將と謂ふ可く、若し夫れ社會主義者特に Lassalle, Marx の輩に至りては、此誤れる經濟學説を根據として太たしき偏僻過激の言論を弄したる者なり。社會主義者の末派が往々スミスやリカードの説を金科玉條と爲し、之を眞向に掲げ來りて自家の陋を飾らんとするは、寧ろ曠飯に値す、且スミス氏等に對して氣の毒の情に堪えざるものあり。スミス氏の價值説は不完全なりと雖も、幾多の眞理を包含す、而してそれ等は後世學者に依りて修正展開せられたる所なり。スミス氏の説が社會主義者に採用せられ、同時に又資本主義者に援用せらるることあるは、一には、氏の頭腦が實に善く圓滿平均に發達せるを證するものと謂ふべく、之に反して彼のマルクス氏の如きは至て偏倚不平均なる頭腦の持主と謂ふべき歟。

次に主觀的價值論の代表者としては、第十四世紀に Johannes Buridanus (千三百五十八年歿) ありて、マグヌス及びトーマスに反對したり。マグヌス及びトーマスの意見は頗る宗教的色彩を帯び、價值及び價格は、費用即ち財貨に向て加へられたる勞働辛苦の大きさに由りて定められざるべ

からずと思考したり。然るにブリダヌスは、費用なる客觀的要素を採らず、只主觀的なる欲望を以て價値の根本と爲し、物の正當なる價格は、個人が勝手に定むるものに非ずして、社會的平均的欲望に従ふものなりと思考したり。

コンデヤック氏に至りては更に一層明快詳密なる主觀的價値及び價格説を公にしたり。其詳細は余が前章に掲げたる譯文に依りて之を知るべし。氏は曰く『たとひ諸物は吾人の用途に適する性質を有つに由りてのみ始めて價値を有つべしと雖も、若し吾人が諸物の此性質を有つことを判斷せざるに於ては、諸物は吾人に向て何等の價値を有せざるべきなり。故に諸物の價値は主として吾人が效用に就ての判斷の上に在るなり。而して只吾人が諸物の效用の大か小かを判斷するに由りてのみ、諸物の價値が大か又は小となるものなり』と。氏は又曰く『價格とは、一物に就て見積れる價値を他の物に就て見積れる價値に比したるものに外ならず。即ち一般にそれ等の物に就て、交易を爲す人々の總てに依りて一般に見積られたるものなり。交易の下に於て、諸物は決して絶對的價格を有せず、只吾人が取引を結ぶ瞬間に於て、吾人が爲す所の見積りに對する關係的價格を有するのみなり。而してそれ等の物品は相互に他の物品の價格となる』と。

以上拔萃再擧したる所に依るに、コンデヤック氏の價値價格説が主觀的のものなるは明かなり、後世英のジョヴァンニス氏、瑞西の Walras 氏、澳の Menger 氏の如き共に第十八世紀の第七十年頃に

於て、謂ゆる最終效用若くは限界效用の原理を闡明し、更に晩近に至りては Wieser, Böhm-Bawerk, Person, Clark, Gide 等の諸氏あり、益々主觀的價值説を展開したり。然り則ち吾人經濟學徒が、今日に於て、斯學の父と稱せらるる アダム・スミスを祝祭して、其學徳を頌するの秋に方り、氏の説を修正せる諸新大家の説の先驅とも謂ふ可く、且スミスと同時代の學者たるコンヂャック氏の説を紹介するは、蓋し亦無用又は不當の業に非ざるべしと余は信するなり。

然れども、此論文の大意は余が去る六月五日我大學經濟學部に屬する學會（即ち京都帝國大學經濟學會）が主催せるスミス氏生誕二百年祝祭日の午後の講演に於て、其時與へられたる僅々四十五分の少時間に於て述べたる所に係り。而して余は其後旬日を出でずして歐米各國巡遊の途に上りたるを以て、横濱より北米に至る航海中に於て、更に起稿し、纔に之を綴り畢るを得たる所のものなり。行文意の如くならず、考證思索遂に豫期の十一を達する能はざるは、余の大に遺憾とする所なり。然れども上陸旅行の後は、到底執筆の暇を得べからず、且又投稿の期日に後るの虞も少なからざるを以て、茲に匆匆として筆を擱くことなせり。時に大正十二年六月廿五日太平洋上、ヴィクトリヤ港を距る四日程の所、日本郵船株式會社汽船靜岡丸の船内に於て識す。